中学校

平成12年度

教育研究員研究報告書

国　　語

東京都教育委員会

平成12年度

教育研究員名簿（国語）

班	区市町村	学校名	氏名
1班	目黒	第四中学校	大関由貴子
	杉並	泉南中学校	石川俊一郎
	足立	入谷南中学校	小倉薫
	立川	立川第九中学校	矢代昌幸
	調布	調布中学校	白石典子
	稲城	稲城第二中学校	○ 齋藤正三
2班	新宿	西新宿中学校	◎ 中里史子
	北	豊島北中学校	梶田真理
	大田	大森第二中学校	平野雅仁
	板橋	向原中学校	川畑秀成
	葛飾	上平井中学校	檜森誠
	江戸川	葛西第二中学校	勝田敏行
	東久留米	西中学校	緒方信夫

◎ 世話人　○ 副世話人

担当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　田中洋一

目次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究の構想
1　基本的な考え方 …… 2
2　研究の方法 …… 3

Ⅲ　研究の内容
1　1班
(1)　ねらい …… 4
(2)　指導の実際 …… 5
(3)　まとめ …… 13
2　2班
(1)　ねらい …… 14
(2)　指導の実際 …… 15
(3)　まとめ …… 23

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

研究主題

情報を生かして考えや思いを深め、状況に応じて伝える力を育てる指導法の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

国際化、情報化など、社会の様々な面での変化が急速に進んでいる。激しく変化するこれからの社会をよりよく生きていくためには、互いの立場や考えを尊重して言葉による伝え合いを効果的にし、相互の理解を深め豊かな人間関係を構築し、協力して社会生活を向上させていくことが必要である。

しかし、生徒の現状はというと、言葉による伝え合う力や豊かな人間関係を結ぶ力は十分には育てられていない、という指摘がある。生まれた時からテレビ・ラジオ・ビデオ・テレビゲーム等から一方的に言葉が流され、言葉が氾濫した中で育ってきたために、「相手」や「場」や「目的」を意識して対話する機会も十分とは言えない。また、日常的に読書をしたり新聞を読んだり、という習慣のある生徒数も減ってきており、いわゆる「活字離れ」が指摘されて久しい。そうした中では、一つの言葉を深く考えたり、言葉の重みや深みを実感したりする機会も少なくなっている。少ない語彙の表面的で一面的な理解にとどまっているようにも思える。

このような状況の中、国語科で育成すべき能力は多岐にわたる。教育課程審議会は国語科の改善の基本方針として、「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る」（平成10年７月29日）と答申した。これを受けた新学習指導要領の国語科の目標は「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めると共に、思考力や創造力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」である。言語の教育としての立場を重視する国語科が育成を目指す基本的な能力は「表現力」と「理解力」であり、それらを基盤とした「伝え合う力」なのである。ここでいう「伝え合う力」こそが、それぞれの人間関係の中で互いの立場や考えを尊重しつつ、言葉によって互いに伝達し、分かり合うことを可能とする言語能力を意味している。そして、これは協力して社会生活を向上させていくためのまさに基盤となる力なのである。

また、「総合的な学習の時間」が創設されることに象徴されるように、生徒が主体的に情報を活用する姿勢や能力の育成がこれまで以上に求められている。現代及び未来に向けた情報化の時代には「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」としての情報活用能力の育成も欠くことができない。その基盤はやはり国語科において育成されるべきものではないだろうか。

さらに、急激に変貌しつつあるこれからの社会に主体的に対応し、自己実現を図るためには、新たな発想を生む力となる論理的な思考力や過去の経験を組み合わせることにより新たなイメージを作り出す創造力が必要である。加えて言語に対する正誤・適否・美醜などの「言語感覚」を豊かにすることも求められている。そしてこれらの能力が培われていく過程においては、常に言葉が介在しているのである。

以上のような社会的な背景や国語科としての課題に応えるために、本部会において標記研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の構想

1　基本的な考え方

“どのようにして情報を正しく把握し、そこからどのように考えや思いを深め伝えていくか”私たちは、この点を基本的な考え方の中心に据えて、研究を進めた。

私たちは「情報」というと、「社会の動き」や「最新の知識」を知り得ることととらえ、その収集手段として、まずテレビ、ラジオ、新聞、雑誌等のマスメディアを思い浮かべることが多い。しかし、提供される膨大な情報の中には事実でないものもあり、また事実であっても、それらは発信者の意図によって加工されたものであって、必ずしもすべてが伝えられているとはいえない。例えば、テレビで環境破壊のニュースとして、新空港の着工が否定的に伝えられた時、そこからは空港開設によって得られる便利さや経済効果といったプラス面までは伝わってこないことがある。つまり、発信者が何を主眼において報道するかによって、受け手に与える印象は大きく変わってくるのである。

また、日常生活の中では、同じ言葉でも、使い方や受け取り方によっては互いの気持ちが行き違うこともある。例として、「ありがとう」という言葉を考えてみよう。「ありがとう」とは、言うまでもなく感謝の気持ちを表す言葉である。しかし、この言葉が、仮に気まずい雰囲気の中、険しい表情や強い口調で発せられたとしたら、どうであろうか。本来の意味とは違って発信されたと受け取るだろう。つまり、言葉とは、それを発信した側と受け止める側それぞれのその時の心情や状況、またちょっとした言い回しの違いや置かれている立場の違いなど、さまざまな要因によって、その意味も微妙に変化していくのである。

以上の点を生徒に気付かせ、そしてそこから深く考えさせるための活動として、私たちは、「人からの取材（インタビュー）」と「新聞の比較読み」を取りあげた。そしてそれらを使って、本研究では２つの指導目標を設定した。ひとつは、生徒自らがインタビューで得た身近な情報の整理・分析を通して、考えや思いを言葉でより適切に表現させることである。もうひとつは、新聞からの情報を通して、ひとつの事象に対しても、書き手によってさまざまな視点があり、それによって受け手の印象も異なってくることを認識させることである。

それでは、これらの指導の中に、教科の特性をどのように生かしていったらよいのだろうか。これまでにも、情報を活用した学習は、すでに各教科や領域で広く実践されている。「総合的な学習の時間」においても、情報教育と関連させた学習の重要性が説かれ、その研究が進められている。

そこで、前述の指導目標を達成させる手だてとして、以下の仮説をたてた。ひとつは、インタビューとプレゼンテーションを通して言語生活を見つめ、言葉のもつ微妙な意味合いに気づかせることによって、互いの考えや思いを深めることができるのではないかということ、もうひとつは、新聞の比較読みをさせることで、その内容や発信者の意図を正確に読み取る能力を高めることができるのではないかということである。

これらの仮説を検証するために、２つの班に分かれて実際の授業を組み立て、研究を進めていくことにした。

1　研究の方法

前述の基本的な考え方に立ち、班を二つに分け、それぞれの班で、音声言語・文字言語両面から、指導法の工夫・改善を重ねながら研究を進めた。

1　班

1班では本研究の推進にあたって「インタビューで得た情報を生かして、言語で適切に表現する力を育てる指導法の工夫」という副主題を設定し、音声言語を中心とした指導法の工夫を試みた。言葉は、お互いのコミュニケーションをはかるための手段でもあるのだが、状況によって、話し手の意図を正しく伝えられなかったり、聞き手が正しく受けとれないと言う場合も多い。

そこで、自分の経験の中から、伝える側としての経験、伝えられる側としての経験をあげさせ、そこから、同じ言葉でも、状況や使い方によって違った意味合いになってしまうことに気付かせることにした。

さらに、自分の経験という枠を広げて、幅広い年齢層の人へのインタビューを通して同じような情報収集を行い、個人の分析を経て、班での整理、分析をさせた。

そして、「なぜ思いが伝わらなかったのか」「どうすればよかったのか」という観点で、寸劇を中心としたプレゼンテーションをさせた。特に話し手の意図が聞き手に正確に伝わらなかった場合には、どのようにすればよかったのかを必ず発表させるようにした。

最後に、これらの音声言語を中心とした活動を通して考えたことを、各自が文章に表現することでまとめとした。

2　班

2班では本研究の主題をもとに「新聞からの情報を生かして、広い視野と柔軟な発想を育てる指導法の工夫」という副主題を設定し、文字言語を中心とした指導法を試みた。

社会の激しい動きの中にあって、文字を通して情報を得ることが、生徒たちの中にどの程度意識されているのかを探るために、まずアンケート調査をおこなった。新聞や雑誌から情報を得るということでは大いに期待はもてたものの、記事やコラム欄にいたっては関心の薄いことが見えてきた。そこで、新聞の記事やコラムの比較読みを通して情報の主体的な受け止め方を学ばせると共に、情報源としての新聞に、親しませたいと考えた。

研究を進めるに当たり、最も重要なのが、適切な教材選びである。ひとつの事象でも多様なものの見方ができるような教材であり、比較読みにも適し、なおかつ新鮮でタイムリーな記事コラムであること。生徒たちには新しい情報を意識して受け止めていくことに気付かせ、情報に関して自分の意見をもたせ、発表させた。さらに発展学習として、別の記事に対する自分の意見を構築し、他の生徒の意見と比較させることを試み、まとめとした。

以上のように、1班の音声言語、2班の文字言語を中心とした活動を通して、情報を生かして考えや思いを深め、状況に応じて伝える力の育成が可能になると考え、本研究を進めた。

Ⅲ　研究の内容

1　1　班

(1)　ねらい

日進月歩の勢いで情報機器や情報産業が進歩するなかで、子どもたちを取り巻く言語環境は大きく変化している。

そうしたなか、平成14年度からの新教育課程の完全実施に向けて、国語科でも、時間数の削減に伴い、その内容の厳選と授業そのものの発想の転換を求められている。それは、教師の一方的な説明型の授業から、生徒一人一人の言語活動を重視した授業への転換であり、そこから考えや思いを深め、状況に応じて、相手とのコミュニケーションをはかる力が育てられるのではないかと考える。

人は、言葉によって物事を認識し、考え、理解する。そして、言葉によって自分の考えや思いを相手に伝え、また相手の考えや思いを知る。だから、言葉を正しく理解し、適切に表現する能力を身につけることが、相手との人間関係を作り上げる第一歩だと考える。

しかし、近年の言葉の乱れに関する指摘は周知のとおりであり、若者に限らず、言葉の専門であるアナウンサーまでが、本来の言葉の意味を取り違えて使うことも少なくない。

そこで、１班では音声言語に着目し、人と人との関係を意識しながら、必要な情報を主体的に収集・処理し、また情報を交換しあうことで、お互いの考えや思いを深めることができるのではないかと考え、指導の手だてを工夫した。

はじめに、「情報を生かす」という面からは、主体的に情報を収集する力を育てることを目指した。そのために、自分や友人の言葉に関する経験を振り返らせた。また、自分たちの経験だけでは情報としては不充分なので、幅広い年齢層からも情報を収集させることにした。方法としては、音声言語で人と直接触れ合う手段であるインタビューを中心とした。インタビューをさせるにあたっては、まず手引きを作り、「話すこと・聞くこと」の基本を学習させ、その上で情報収集にあたらせた。

次に、「考えや思いを深める」という面では、分析を通して互いの考えや思いを深めさせることを目指した。そのために取材内容を個人で分析させた。さらに、それを班に持ち寄って、話し合い活動を通して班ごとに分析させた。

また、「状況に応じて伝える力を育てる」という面では、プレゼンテーションを通して相手に考えや思いを伝えることを目指した。プレゼンテーションは、寸劇を中心とした発表形態をとらせた。それは、演じる側も、見る側も、状況がより身近に感じられるからである。ここでは、手引きを参考にして、自分たちで工夫して台本を作り、状況に応じて考えや思いが伝えられるようにした。

最後に、本単元を通して、「言葉について考える」という題で意見文を書かせることで、まとめとした。

以上のような音声言語を中心とした活動を通して、現在の言語生活を見つめる機会をもたせ、これからのよりよい言語生活につなげることを最終的なねらいとした。

本研究を通して、言葉の意味を一義的にとらえるのではなく、多面的にとらえて用いようとする態度を育てていきたいと考えている。

(2) 指導の実際

① 【研究主題との関連】

副主題「インタビューで得た情報を生かして、言葉で適切に表現する力を育てる指導法の工夫」

同じ「ありがとう」という言葉でも、受け手にとって時にはうれしく感じ、またある時には嫌な気持ちにさせられることがある。こうした身近な言語体験に着目した。

1班では、インタビューで得た情報をもとにしてプレゼンテーションする、という活動を通して、音声言語の面から研究主題に迫ろうと考えた。言葉には、表す意味がひとつの単純なものから、多くの意味をもつ複雑なものまで多岐にわたる。特に感情を表す言葉には、微妙な意味合いや奥行きをもたせた表現のできるものが多いが、使い方や受け取り方によっては、互いの気持ちが行き違うこともある。特に音声言語は、そうしたことを実感する場面が多い。音声言語のもつ特性について考えを深め合うことが、状況に応じて伝える力を育てることにつながると考えた。

② 【使用教材】生徒のインタビューをもとにして学習する。補助資料として高田敏子「心を伝える」(光村図書出版　国語一　昭和59年度版）を使用。

③ 【指導の手立て】

ア　主体的に情報を収集する

自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考え主体的に判断し行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を身に付ける必要がある。そのような資質や能力の育成を目指し、意欲を喚起するために自分で情報を収集することから始めさせようと考えた。

○　自分自身の言語体験の振り返り

○　インタビューを通した情報収集

イ　考えや思いを深める

個人が調べた情報を班の中で整理・分析することで、それぞれの不足している部分や優れている点に気付き、補い合うことができるのではないだろうか。また、小グループの中なら意見も言いやすく、互いの考えを深めることができるだろうと考えた。

○　収集した情報の個人での分析

○　収集した情報のグループでの分析・検討（班活動）

ウ　プレゼンテーションを工夫する

伝える目的・相手・場の意識を育てるための方法として、プレゼンテーションを設定する。その中で聞き手の立場に立った発表を工夫させる。また、そのことが相手の意図を理解しながら聞き取ろうとする姿勢にもつながるのでは、と考えた。

○　収集・分析・検討した情報を伝える準備（班活動）

○　プレゼンテーション（寸劇形式を中心として取り入れる）

○　聞き取りメモの工夫と活用

④ 【指導目標】

ア　情報を収集し、活用しようとする態度を育てる。

イ　日常の言語生活に関心をもち、適切に表現しようとする態度を育てる。

ウ　目的や相手に応じて、的確に話したり聞いたりする態度を育てる。

⑤　【指導計画】（７時間扱い）

時	学　習　活　動	指導上の留意点
1	○５種類の「おはよう」を読んで、受ける感じについて考える。 ○「おはよう」という一言だけでもいろいろな言い方があることを知る。 ○「言われてうれしかった言葉」「言われて嫌だった言葉」「言ってよかった言葉」「言って失敗した言葉」を言語体験から探し、ワークシートに書き出したり、友達の探した言葉を聞いたりする。 ○なぜ、同じ言葉なのにうれしかったり、嫌だったりするのか、考えたことを書く。	○ワークシートを用いる。（資料１） ○恥ずかしがらずに楽しく声を出せる雰囲気を作る。 ○違いがあることに気付かせる。 ○たくさんの生徒に言わせる。 ○様子を見て、言葉が出にくいようなら、随時相談させたりヒントを与えたりする。 ○同じ言葉でも「言われてうれしい」場合だけでなく「言われて嫌な」場合もあることに気付かせる。 ○書ける生徒にはどんどん書かせる。
2	○今後の授業の流れについて知る。 ○さまざまな年齢層の人の言語体験を取材してくることを知る。 ○情報収集の方法について知る。 ○インタビューの仕方、留意点を知り、練習する。 ○だれにいつインタビューするのか、班の中で確認させる。	○模造紙に書いて示す。 ○前時の学習の意味、位置付けを確認する。 ○前時に出てきた言葉を思い出させる。 ○インタビュー以外の方法が思い付く人は自由に取り組んでよいことを話す。 ○マニュアル化したワークシートを使う。 ○班単位で取り組ませる。各自、１～３人に取材してくるように指示する。
3	○インタビューしてきた言葉について個人で分析する。 ○取材し分析した言葉を班内で発表し合う。 ○寸劇を中心としたプレゼンテーションとして紹介したい言葉を班で話し合い、選ぶ。 ○辞書で言葉の意味を確認する。 ○適切な言葉の使い方について話し合う。 ○プレゼンテーション（寸劇）の例を見たり、聞いたりして、参考にする。	○取材用紙をもとに分析させる。 ○個人的な支援が必要な生徒には、時間をかける。 ○話し合うことで分析し、プレゼンテーションにもっていけるような手引きを用いる。（資料２） ○話し合いがうまくいかない班には、個別の支援をする。 ○適切な例を用意する。

4	○同じ言葉であっても次のように受け取りかたが違ってしまう場面を寸劇で演じることについて知る。 A　言われてうれしかった、言ってよかった言葉 B　言われて嫌だった、言って失敗した言葉 C　「B」の改善例 ○寸劇台本作りの際の手順、留意点、工夫点などについて話を聞く。 ・1班3～5分以内（出入りふくめて） ○班で寸劇台本作りをする。（資料3）	○プレゼンテーションでは寸劇の中にキャッチコピー、標語などもいれてよいことを話す。 ○Bの場合、どうしたら失敗しなかったのか考えさせる。Cでは、こうしたらよかったのではないかという例を演じさせる。どんな観点で改善したのかを言わせるようにする。 ○「言葉の学習」であることを強調する。 ○名札をつけたり、状況を模造紙で示したりという工夫を例に挙げる。 ○役割分担についても考えさせる。
5	○台本にしたがって、寸劇の準備、練習をする。立ち稽古、動作をつけての練習をする。 ○発表会で用いるカードなど小物の用意をする。 ○発表会の持ちかたについて知る。	○班ごとに個別に指導する。 ○台本を見ないで演じられるように練習させる。 ○懲りすぎないように注意する。 ○進行役、ナレーターなどの話すことの確認をする。 ○発表順なども決める。
6（本時）	○「寸劇発表会」を行う。 ○聞き手は終わってから聞き取りメモをとる。 ○指導者の講評を聞く。	○発表会にふさわしい座席配置など、工夫する。プログラムは、模造紙などに書いて掲示する。司会は、指導者。 ○自分ならどんな言葉を使うかというアドバイスと発表者へのメッセージを書かせる。 ○聞き取りメモは最後に集めて点検し、発表グループに渡す。
7	○「心を伝える」（高田敏子）を読み、これまでの学習を振り返る。 ○学習全体のまとめの意見文を書く。 ○学習全体を振り返り、自己評価する。	○指導者がゆっくり範読する。 ○罫紙に題名例のヒントをいれ、意見文として書けるよう配慮する。（資料4）

⑥［本時の指導案（第六時）］

ア　目　標

1．発表者として聞き手にわかりやすい説明や表現を心がける。

2．聞き手として発表をよく見聞きし、発表者の意図をくみ取って内容を理解する。

3．発表内容について、アドバイスする。

4．言葉の微妙な意味合いに気付き、その場にふさわしい適切な言葉を使おうとする意識をもつ。

イ　展　開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	○「寸劇発表会」の目的を確認する。 学習のめあて ①発表者は声の大きさや話す速度を工夫して、伝えたい内容が聞き手によくわかるようにしよう。 ②聞き手は発表者の説明や表現をよく見聞きして、内容の理解に努めよう。 ③各自が発表を聞いて考えたことやアドバイスをメモしよう。	
	○発表の順番を確かめる。 ○発表上の注意を聞く。	○発表順を書いた模造紙を黒板の横に貼っておき、それを指導者が示す。 ○各班の持ち時間は3～5分。失敗を恐れずに堂々と発表するように助言する。 ○発表者はとりあげた言葉と場面（場所）と登場人物について書いた紙を、黒板にタイミングよく貼っていくように指示する。
展開	○班ごとに発表する。 A　「言われてうれしかった言葉」または「言ってよかった言葉」について。 B　「言われて嫌だった言葉」または「言って失敗した言葉」について。 C　「B」の場面での改善例について。	○司会は指導者が行う。 ○発表会の雰囲気をつくるために、座席の配置などを工夫する。 ○「聞き取りメモ」を配布し、自分ならどんな言葉を使うかというアドバイスと、発表者へのメッセージを書くように助言する。 ○発表に集中するために、「聞き取りメモ」は発表後に記入することを指示する。
	○聞き手は「聞き取りメモ」にアドバイスやメッセージを書く。	○発表後、必要に応じて補足をし、「聞き取りメモ」への書き込みを指示する。

展開	○互いの発表について、アドバイスし合う。	○発表者と聞き手との交流が図れるよう留意する。
まとめ	○指導者の講評を聞く。 ○次時の学習内容を知る。	○指導者は発表について良かった点を中心に述べる。 ○「聞き取りメモ」を集め、次の時間に班ごとに渡すことを告げる。 ○次の時間には、本単元の学習を通して「言葉」について考えたことを意見文にまとめることを告げる。

ウ　評　価

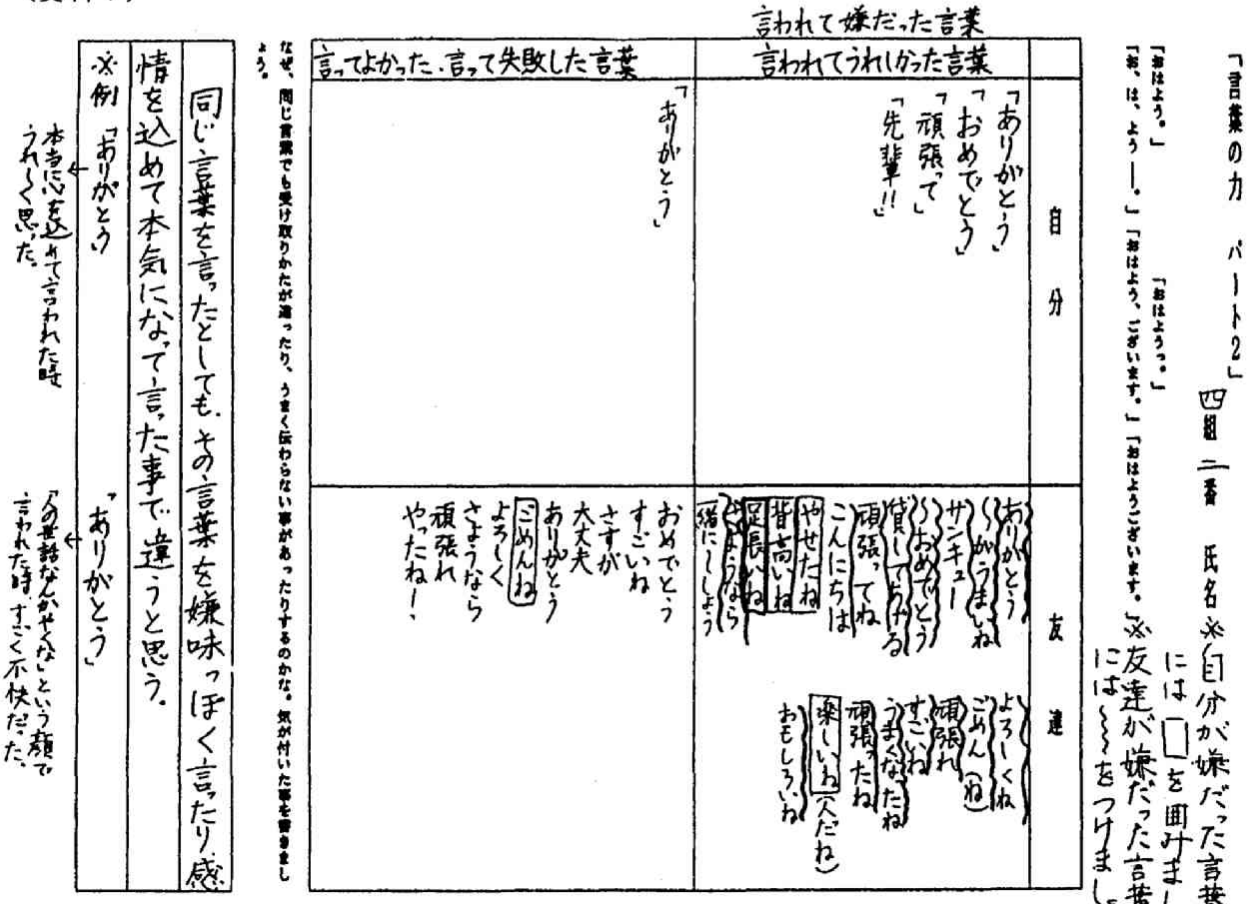
1．発表者として聞き手にわかりやすい説明や表現ができたか。

2．聞き手として発表をよく見聞きし、内容を理解することができたか。

3．発表内容について、アドバイスすることができたか。

4．言葉の微妙な意味合いに気付き、その場にふさわしい適切な言葉を使おうとする意識がもてたか。

（資料１）



（資料２）

二年生　国語プリント　　分析①

☆取材した「言葉」を分析する。　　A組　2　班　氏名

（一）それぞれがインタビューで取材した言葉を、その時の状況の説明を加えながら、班員に伝えよう。班員は発表を聞きながら、Aの欄に「言われてうれしかった言葉」、Bの欄に「言ってよかった言葉」を書き込み、「言われて嫌だった言葉」と、「言って失敗した言葉」を四角で囲んでおこう。

話し合いの進め方

（班長）　これから取材したことを班長の右側に座っている人から順番に報告して下さい。まず、Aの「言われてうれしかった言葉」について「取材相手」と「言葉」と「その状況」からお願いします。

（班員1）　私は、最初にお母さんに聞いてみました。言葉は「ありがとう」です。それは、駅の券売機の前で切符を買うのに迷っていたおばあさんに教えてあげた時に、にっこりと笑って「ありがとう」と言われて嬉しかったそうです。次には、目黒通りを歩いていた40歳くらいの男の人に聞いてみました。その人は、……。

（班長）　それでは、今の報告にあった言葉をプリントに書き込んで下さい。では、次の人の報告をお願いします。（全員の発表を聞く）

（班長）　では次は、「言われてうれしかった言葉」の中で、「言われて嫌だった言葉」とその状況についてさきほどのように報告して下さい。（また全員に聞く。）では今発表に出された言葉を四角で囲んでください。

（Bについても同様に進める。）

※ いとこの 20代 ときいた。

A　「言われてうれしかった（嫌だった）言葉」	B　「言ってよかった（失敗した）言葉」
・友達と仕事や人生の事を話していたら何人かの人達に「お前は強いなぁ」と言われた。自分は強くありたかったからその言葉はとても「うれしかった。自分のやってきている事はまちがっていないんだと思い励まされた。 **嫌** ・自分の悩み事を素直に言えなくてその場の雰囲気をこわしたくないから明るい口調で相談しておたら、「普通、もっと落ち込んでるもんなんじゃないの？けどお前は強いから、けっこう平気なんだろうな」と言われた。明るくふるまって強がっていたのに、少し後悔した。	友達が以前から仕事がうまくいかない、と相談された。他の人と合わなくてムシされるらしいだから「別にシカトされてもいいじゃん。みんな意外と見てそうで見てないよ」と言ったら友達がうまくいくようになったようで感謝された。 **失敗** 友達が異様に自分の外見を気にするようになったので彼女に自信がないから周りの目をきにするんだと思っていたので「全然今のままで平気だよ。そんなに周りの人、見てそうで見てないよ」と言った。後日聞いたら、その時、好きな人がいたらしく、彼は自分の事見てないんだという意味で彼女にとられてしまいショックだったらしい。

（資料４）

国語学習プリント

「言葉について考えよう」一学習のまとめ

今回の学習を通して、考えたことを、意見文にまとめよう。題名は次のような例を参考にしてつけよう。

（例）

・言葉のもつ力　・心を豊かにする言葉　・言葉は人を変える
・心を伝える言葉　・人を幸せにする言葉とは　・言葉の学習を通して学んだこと
・心と心を結ぶ言葉　・心に響く言葉

言葉のもつ力

この学習をとおして思った事、それは、明るく言ったり暗く言ったりするだけで相手にいい気分にさせたり悪い気分にさせたりするんだなという事です。インタビューを二人にしましたが二人共同じ感じだったのです。その時はうれしかったけど、別の時は嫌味ぽく聞こえました。私もそういう時があります。そういう時は「それ嫌味？」って聞いたりします。自分に自信を持たせてくれる言葉もあれば逆にプレッシャーになってしまいます。私の場合、親にテスト前に「がんばってね。」と言われると、プレッシャーになってしまいます。そういう風に言ってるつもりはないと思いますが私にとってその言葉は成績をおとすなよと同じ意味にきこえてしまい、逆にやる気がなくなってしまいます。最近はあまり言わないでと言ったりしています。この授業をやって、私は台本を作ってみたら、とても大変だけれど、とても楽しかったです。みんながそれを演技してくれるのがとてもうれしかったです。また授業でやってみたいと思いました。今度は本当の劇、クラス全体でやりたいです。それからもっとたくさん練習時間がほしかったです。そうすれば、もっと良い劇ができたと思います。男子も、もっとまじめにとりくんでほしかったです。私達の発表で、笑いがとれたし、スゴイ失敗もしなかったから成功だったと思います。

A組44番　氏名

自己評価　あてはまるものすべてに○をつけよう。

Ⓐ この学習を通じて、言葉に関心がもてた
Ⓑ 言葉の使い方を意識しようと考えた
Ⓒ インタビューの仕方についてよくわかった
Ⓓ インタビューが上手にできた
Ⓔ 班の話し合いに積極的に参加できた
Ⓕ プレゼンテーションに工夫ができた
Ⓖ 友達の発表をよく聞く事ができた
H　その他

（資料３）

寸劇台本を作ろう　（A組）（2班）

発表する言葉・・	強いんだね。	
	第一話	第二話
あらすじ		
日時（いつ）	ある日の夕方	ある日の夕方
場所（どこで）	公園	公園
だれが（配役A）	彼女が（菱）	彼女が
だれと（配役B）	彼氏と（潤）	彼氏と
どういう状況での会話か（どんな気持ちか）	雰囲気もこわしたくないなと、明るい口調で相談している。	雰囲気を気にせず素直に相談する

役割分担（第一話）	氏名
脚本	
司会（ナレーター）	
配役A（役名）	配役C
配役B（役名）	
装置・効果	

役割分担（第二話）	氏名
脚本	〃
司会（ナレーター）	〃
配役A（役名）	〃　配役C　〃
配役B（役名）	〃
装置・効果	〃

役名等	台詞	ト書き・メモ
司会（ナレーター）	これから、（2）班の発表を始めます。僕たちが選んだ言葉は、「強いんだね。」という言葉です。私達が取材した20代の女性の人が大学の友達と一緒に飲み会で自分の仕事観・人生観・恋愛観を話していたら、何人かの人達に「お前は強い人だね。」と言われたそうです。その方は「強くありたい」と思っていたからこそとてもうれしく、励まされたというお話もしてくれました。 次は同じ「強いんだね。」という言葉を言われて嫌だなと思った時の事を寸劇で発表します。彼女は友達に呼びだされました。 「ねえ菱、友達から聞いたんだけど潤と付き合ってるって本当？」	
菱	「あぁ、うん、付き合ってる。」	
友達	「私が潤を好きって事、言ったら怖がってやめるって言ったじゃん。」	
菱	「…。」	
友達	「信じられない。」	ときどき言い淀む。
ナレーター	その後、ある公園での一場面です。ある日の夕方、菱は潤に相談したくて、会う約束をしました。でも菱は雰囲気もこわしたくないように明るい口調で話すことにしました。	
菱	「あのさ、相談があるんだけど。」	明るく。
潤	「なに？。」	
菱	「友達とケンカしちゃって。」	
潤	「ふうん。それで？。」	
菱	「全然、話しも聞いてくれないって、仲直りしたいんだけどどうすればいいかなぁ。」	

潤　「そういう時、もっと強い男がいいけど、お前は強いからね。」こうは言ったんだろうな。

ナレーター　彼女はこの時は強いと思われている自分を少しだけ後悔したようです。これから、この時、どうすれば後悔せずにすんだのか私達は考えました。それを寸劇にして発表します。

菱　「あのさ、相談があるんだけど。」

潤　「なに？。」

菱　「友達とケンカしちゃって。」

潤　「ふうん。それで？。」

菱　「全然、話しも聞いてくれないって、仲直りしたいんだけどどうすればいいかなぁ。」

潤　「まあ、あんまり力やみてみればいいと思うの。」

菱　「無理？もしそうだけど、ちょっと相談。」

ナレーター　私達は女子素直に相談する雰囲気がとんでもないなと思いました。素直に言えないと彼に気持ちが伝わらないと思います。

とうすれば本当に悩んでいるんだということが分かってもらえると思います。私達が考えた中でチョイスしたのは…

合唱：「素直がGood!!」

ナレーター　いかがでしたか？。これが私達の出した結論です。これで2班の寸劇発表を終わります。

ナレーター　―班員全員集合する―

ナレーター　一同、礼!!

脚本は？

分かりやすくする。

ナレーターは？

はっきりと言う。

役者は？

気持ちをこめて表情をつける。

装置や効果音などは？

言葉をパネルにしてマグネットで黒板にタイミング良くはる。

＊注意・ただし、音響や装置などは最低限でよい。

例えば、衣装は、「先生」・「生徒」・「先輩」・「お母さん」などの名札を首からさげるなど。

装置は、背景になる黒板に「教室」・「公園」・「体育館」などの張紙を貼るなど。

音響は、係の生徒が、生の音をタイミングよく入れる。たとえば、見えないように注意して影で机をたたいて、ノックの音を入れるなど。

◎　五分以内で、効果的に演じられるように何度でも練習を繰り返し、発表に備えよう。

台詞は、もちろん覚えてしまうこと。

まとめ

1班では、副主題に沿って音声言語で正確に伝え合うことの難しさに気付かせ、その重要性実感させるために検証授業を重ねた。ここでは、その過程で得られた成果をまとめてみる。

考　察

ア　インタビュー（他の人の言語体験を取材する）

インタビューの仕方については事前に基本的な事柄について指導をし、実際にインタビューする時も手引きを用意した。そのため生徒たちはそれほど戸惑わずに他の人の言語体験を取材することができた。

インタビューという方法を中心としたことで音声言語の実の場を経験させることができた。さらにインタビューの対象をさまざまな年齢層の人におくことで言葉には微妙な意味合いがあることを生徒たちは強く実感することができた。

イ　取材内容の分析

生徒一人一人の言語体験の振り返りや、取材してきた言葉の分析を通して、同じ言葉でも違った意味でとらえられる場合があることに気付かせることができた。その際、分析の観点を明確にしたことで、言葉そのものの持つ意味についても深く考えさせることができた。

また、分析するときに班活動を取り入れたことで、互いの考えや思いを深め、それぞれの足りない部分を補い合うことができた。

ウ　プレゼンテーション（寸劇を中心として）

寸劇を用いて擬似体験化をすることは音声言語について考えるうえで有効であった。台本を作りながら言葉を正しく伝えていくためのさまざまな要素に気付かせることができた。

他の班の発表を見ることによって、相手の意図を理解しながら聞き取ろうとする姿勢にもつなげることができた。

聞き取りメモを工夫したことで、言葉を適切に使おうとする意識をもたせることができた。

今後の課題

ア　本研究では対人関係からくる言葉のずれ（例えば、あの人の言うことなら何でも納得できる等）に関しては取り上げなかった。音声言語は深く追求していくと単に言葉の意味だけではつかみきれない面もある。その点に関しては国語科としても今後研究が必要である。

イ　寸劇台本を生徒たちに考えさせる過程が非常に大切である。教員側の適切な指導・助言ができるようにＴＴ（ティームティーチング）などの活用を考えていくことが必要であろう。

2　2　班

(1)　ねらい

現代社会を席巻している情報と情報産業。情報が物質やエネルギーと同等、あるいはそれ以上に重要な資源となり、その価値を中心に今日の社会は変動している。しかもその情報は、発信者の性格や意図によってさまざまに色づけされている。情報に操作されることなく、情報の価値やメディアの情報発信の特徴や意図について主体的に考えようとする力と態度は、これから21世紀を生きる者にとって、必要欠くべからざる資質であろう。総合的な学習が2002年から完全実施されるにあたり、各校でさまざまな試行が行われている。そこで国語科として教科の基礎・基本をふまえつつ、さまざまな情報を受け入れていく方法、また活用していく手段等を身につけさせることが重要であると考えた。

今回の研究にあたり、「情報を生かして、考えや思いを深め、状況に応じて伝える力を育てる指導法の工夫」というテーマに、2班は文字言語を通して進めていくことを話し合った。その情報源として「新聞」を選んだ。新聞には、さまざまな情報が折り込まれ、活字という文字言語を通して情報を得ていくことから、国語科の学習としてふさわしいと判断したからである。また、新聞記事やコラムは、比較的読みやすい文章ではあるはずなのに、生徒たちにはあまり馴染みがない。日常的にも読書をしたり、新聞を読む習慣が少ない生徒たちにとっては、活字離れに歯止めをかける意味でも身近で最も活用価値のある教材であるとし、新聞を使った学習のねらいを次のように決めた。

① 多彩で複雑・また発信者の立場や意図によって加工された情報を、自ら理解し主体的に受け止めようとする態度を養う。

② 数種類の新聞記事・コラムなどの比較読みを通して、様々な考え方や相違点があることに気付かせ、情報を処理する能力を養う。

③ 情報には、多様な考え方や立場で記事が書かれていることに気付き、そこから得た自分の考えを効果的に表現し、発表できる能力を養う。

研究を進めるにあたり授業者が心がけたことは、「新聞」といっても記事や内容に幅があるので、活用するための教材として、学習者が興味・関心の持てる情報（記事・コラム）であること。また、導入教材では、学習の目的が明確なものを選定すること。ひとつの情報に関して各人が自分の意見をもち、発表できるようにさせること。まとめとして、生徒が互いの意見を聞くことによって、より広い視野と柔軟な発想をもつことができるようにさせることである。こうした取り組みによって、生徒は一つの情報に関して様々な角度から考える力を養い、より深く物事をとらえ、状況に応じて伝える力を身に付けることができると考えた。

これから急激に変貌していく社会にあって、人々が主体的に対応していく手段として、情報を収集し、処理し、活用していく能力は、これからますます重要になっていくであろう。本研究は、文字言語を通して、その重要性をあらためて認識するとともに、発展的に活用するための方法を学んでいく態度を育てていきたいと考える。

3　指導の実際

①【研究主題との関連】

副主題「新聞からの情報を生かして、広い視野と柔軟な発想を育てる指導法の工夫」

本研究においていは、情報化が進む世の中で、情報教材の学習を通して、様々な情報から、その違いや、特性を理解し、自分の考えを深め、それを互いに伝えることによって視野を広げ、柔軟な発想をもつことができる能力を育てる指導法を工夫した。

情報源として、われわれ第2班では、新聞を選んだ。新聞には、様々な情報が折り込まれ、活字という文字言語を通して情報を得ていくということから、国語科の学習としてふさわしいと判断したからである。中でも、記事を読み、自身の考えを深め、意見を持つという観点から、ひとつの記事に対して書かれたコラムに焦点を当ててみた。アンケートの結果にもあるように、子供たちは、新聞の中でも比較的短くわかりやすいコラムの欄をあまり読んでいない。コラムの存在そのものに気付かせることも含め、コラムの比較読みをさせ、意見文というものを理解させ、ひとつの情報に対していろいろな意見があることに気付かせる。そして、さらに別の記事に対して自分の意見を構築させ、他の生徒の意見と比較することにより、さらに広い視野と、柔軟な発想ができるような態度を育成したいと考えた。

研究を進めるにあたり以下の点に留意した。

・学習者が興味・関心の持てる情報（記事、コラム）を提供すること。
・導入教材では、現況や、学習の目的が明確なものを選定すること。
・情報に関して様々な考え方があることを知り、自分の考えをもち、発表ができるようにすること。
・互いに意見を発表し、評価ができるようにすること。

②【使用教材】「ものの見方と言葉」（教育出版　中学国語3　平成2年度版）
「新聞記事・コラム」

③【教材観】

導入教材に、「言葉は、物事を分析したり、総合したり、思考を明確にしたりするうえで、私たちの生活にはなくてはならないものであるが、万能ではない。使い方によっては判断を誤らせる場合もあることを知らねばならない。大切なことは、言葉だけに依存するのではなく、あくまでも事実そのものに即して、物事をいろいろな角度からよく観察し、よく考えることなのである。」とあるように、言葉による情報だけに頼りすぎると、判断を誤らせる原因にもなりかねない。

この教材を通して、生徒たちに、ひとつの事象に対して考え方は幾通りもあり、言葉から受ける印象だけに依存するのではなく、物事をいろいろな角度から捉え、柔軟な発想を持つことが大切であることに気付かせたい。

④【指導の手立て】

まず、新聞を一読し、同じ情報でも表現の仕方は様々であるということに気付かせる。次に導入教材を読み取り、学習の目的を理解する。さらに、ひとつの事柄に対する数種類の新聞記事・コラムを読み、それらから受ける印象、相違点についてまとめる。

そして、ある記事を読み、自分の意見文を書いてみる。班ごとにそれぞれが考えたことを意見文として発表し、評価し、感じたこと・思ったことを文章として表現してみる。こうした取り組みにより、生徒はひとつの情報に関して、様々な角度から考える力を伸ばし、いわゆる「情報処理能力」・「情報選択能力」を身に付けることができると考えた。

④【指導目標】

ア　ひとつの情報に対して様々な見方や、考え方があることに気付かせる。

イ　情報を元に、自分の考えや、感想を形成し、伝えることができるようにさせる。

ウ　意見を交換することによって、他人の意見も尊重できる態度を養う。

エ　他人の意見を評価することによって、自分の考えをさらに深めさせる。

⑥【指導計画】（7時間扱い）

時	学　習　活　動	指導上の留意点
1	○新聞の紙面を見て、見出しの付け方や紙面の構成についての説明を聞く。	○同じ事象を扱っていながらも異なる印象を与える複数の見出しを示す。また、見出し・リード文・記事・コラム欄等の配置について説明し、紙面構成の基本を理解させる。
	○導入教材「ものの見方と言葉」を読む。	○教師が範読する。
	○文章の内容を確認しながら、ワークシートに記入する。	○作業が終了した後、模範記入例を示す。容易な内容であり、記入欄が30数カ所あることから、生徒ほぼ全員に順次指名して答えさせる。
	○今後の学習課題を確認する。	○新聞を用いた授業を行うことを説明し、授業及び新聞を読むことに対する興味を高める。
2・3	新聞を扱った学習1（基本） ―― ひとつの事象に対しても多様な考え方・立場があることに気付く ――	
	○新聞記事・社説・コラム等を印刷したものを数種類配布する。	○資料は教師が選択する。資料選択に当たっては下記に留意する。 ① 生徒の興味を引き出すテーマであること。 ② 多様な視点・考え方ができるようなテーマであること。
	実際の授業で使用した資料例 ・日本の調査捕鯨拡大に対する賛否を扱った複数の記事、コラム。 ・地球温暖化などの環境問題に対する複数の記事、コラム。　など	
	○上記プリントを熟読する。	○適宜補足説明を加えながらの範読。そのテーマの背景なども必要に応じて説明する。

	○ワークシートを利用して、その事象に対する多様な考え方とその根拠を理解する。	○個別の作業、小グループでの意見交換、板書での確認等を適宜組み合わせる。
4・5	新聞を扱った学習２（応用） ――多様な考え方を視野に入れながら、自分自身の意見を構築する――	
	○前時とは異なるテーマの新聞記事を配布する。	○補助資料が必要な場合は準備するが、生徒の発想を束縛しないよう、資料数や内容に配慮する。
	実際の授業で使用した資料例 ・少年法改正に対する複数の記事、コラム。 ・原子力潜水艦クルスクの沈没に対する複数の記事、コラム。　など	
	○上記プリントを熟読する。	○適宜補足説明を加えながらの範読。
	○この事象に対する考え方・立場には、どのようなものがあるかを確認する。	○生徒の発言を生かしながら、異なる考え方・立場を確認し、板書する。
	○多様な考え方・立場の中からひとつ選び、それに基づいて意見を文章にまとめる。	○ワークシート使用。「意見」「根拠」「理由」等の項目ごとに記述する。
6	○班単位で前時のワークシートを読み合い、意見発表会の代表を１名ずつ決める。	○教師は巡回し適宜助言する。
	○学級内で意見発表会を行う。発表を聞く生徒は、各発表について評価用紙に評価と感想を記入しながら聞く。	○評価の項目（意見の妥当性、視野の広がり、自己深化）について説明し、聞く側が意識して発表を受けられるよう配慮する。 ○全ての発表が終わった後、講評の形で補足指導を行う。その中で、発表会前後で意見が変わった者や新たな考えをもった者などを確認し、発言をうながす。
7	○発表会で聞いたこと・考えたことをふまえて、この時点での自分の考えを文章にまとめる。	○原稿用紙を使用。他の者に伝えるための文章であることを理解させる。文章中に、自分とは異なる意見やそれへの反論などを含ませるとよいと助言。
	○授業全体を振り返って、アンケート用紙に評価・感想等を記入する。	○原稿とアンケート用紙は両方とも回収。原稿は後日印刷して配布する。

⑦【指導の展開例１】（第３時）・（新聞コラム「調査捕鯨拡大」を扱った例）

ア　目　標

①　ひとつの事象に対しても様々な考え方があることに気付く。

②　コラムの比較読みから、それぞれのもととなる考え方や根拠を理解する。

③　様々なものの考え方を理解した上で、自分なりの考えを持つ。

イ　展　開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	○前時に配布した「調査捕鯨」についての資料を振り返り、それに関わるコラムを読むことを確認する。	○テーマの「調査捕鯨」について振り返らせ、興味を喚起する。
展開	○複数のコラムのプリントを配布し、読む。	○調査捕鯨についての知識や背景についての話を教師が交えていく。
	○複数のコラムに対してそれぞれの立場（賛成か反対か）をワークシート（資料１）に書き込む。	○まず賛成か反対かの立場を明確に読み分けさせる。
	○それぞれのコラムから根拠を読み取り、ワークシートに書き込む。	○資料のコラムを比較して読むことによって、様々な考え方を書き抜かせる。 ○賛否の根拠としては、 ・経済論 ・国際政治論 ・文化論 の観点がある。 　コラムによってすべての観点で述べられているものと文化論だけで述べられているものがあることを読み取らせるようにする。
まとめ	○ワークシートを利用して、多様な考え方とその根拠を理解させる。	○根拠が文化論から述べられているもの、それに加えて、経済論や国際政治論の観点からも述べられているものを指摘し、根拠の多様性を理解させる。

ウ　評　価

①　ひとつの事象に対しても様々な考え方があることに気付くことができたか。

②　コラムの比較読みから、それぞれのもととなる考え方や根拠が理解できたか。

③　様々なものの考え方を理解した上で、自分なりの考えをもつことができたか。

⑧　【指導の展開例２】（第６時）（新聞記事「少年法改正」を取り上げた例）

ア　目　標

①　情報に対して自分なりの意見を文章で表し、それを他の人に伝える。

②　発表を通して様々な考え方を理解し、それを参考にして自分の意見をもつ。

イ　展　開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	○少年法改正の新聞記事から自分で観点を選んで意見文を書いた前時のことを確認する。	○意見文が数種類ある生徒はすべて用意させ、どの観点で書いたかを確認させる。
展開①	○今回はその中でも「実名報道」についての意見文（資料２）を班内で読み、クラスで発表する生徒を決める。	○発表者を選ぶ観点は 「意見に妥当性があるか」 「自分の考えていたこと以外の意見があったか」 「聞いて自分の考えが深まったか」 であることを説明する。 ○発表者には、小見出しを黒板掲示用の大きな紙に書かせる。その際、根拠のキーワードを選んで書くように指示する。
展開②	○発表者が意見をみんなの前で伝える。	○ワークシートにあるように、 「結論」→「根拠」→「理由」 の順に発表させる。 ○意見文を発表し合うことによって、同じ結論でも根拠は多様にあることをとらえさせる。 ○発表者に紙を黒板に貼っていく時、根拠のキーワードについて、補足説明をさせる。

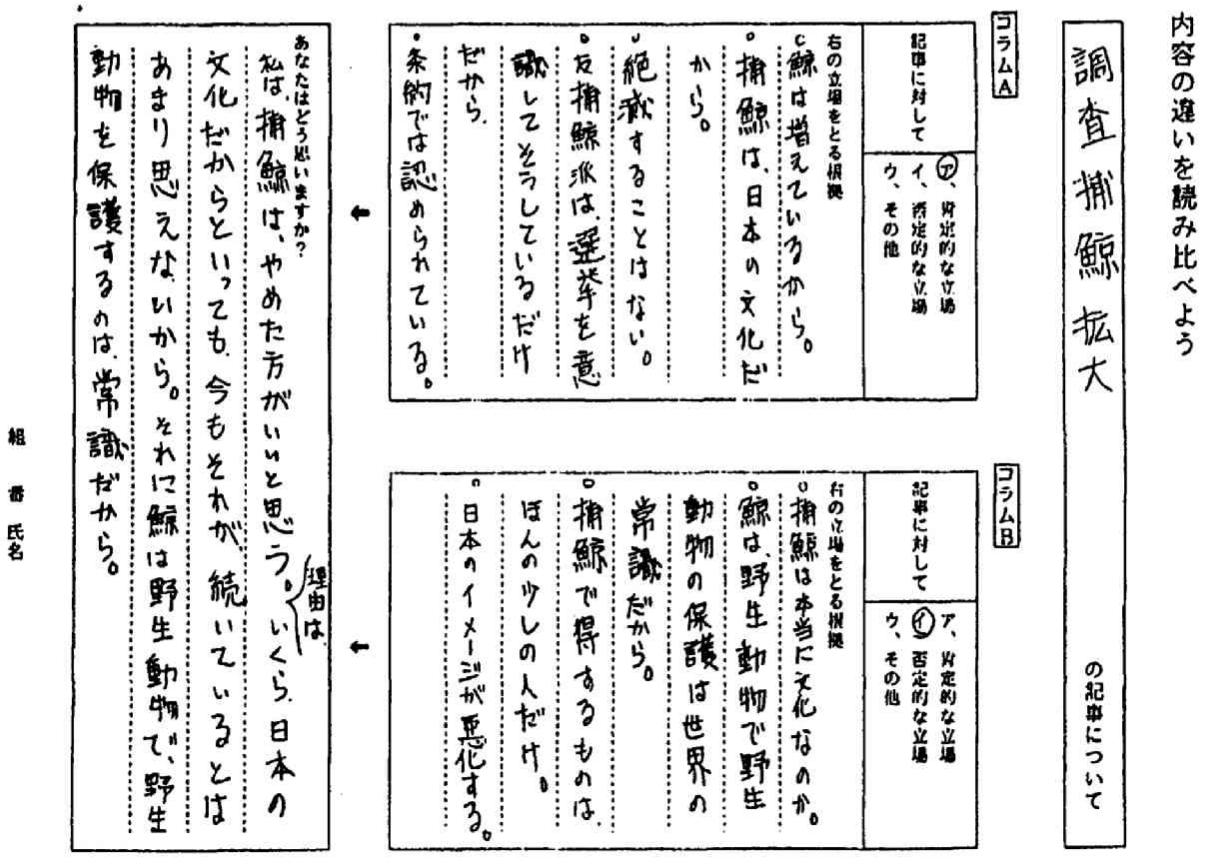
展開②	○発表者が意見をみんなの前で伝える。	○発表した生徒の根拠に偏りがある場合は、教師があらかじめ生徒一人ひとりの意見を把握しておきその他の根拠を書いている生徒を指名するようにする。 ○発表者以外の生徒は、相互評価用紙に記入しながら聞いていく。
まとめ	○全員発表させた上で、意見の相違を考える。	○小見出しをもとに、教師が確認する。 ○発表を聞いて、意見が変わったり、新たな考えをもってもいいことを確認する。

ウ　評価（第６時）

①　情報に対して自分なりの意見を文章で表し、それを他の人に伝えることができたか。

②　発表を通して様々な考え方を理解し、自分の意見を持つための参考にすることができたか。

（資料１）「調査捕鯨拡大」をテーマにした比較読みワークシート例



資料 2

Aさんの意見文

「少年法改正」について意見を書こう

C 組 氏名 A

結論

実名報道は認めない方がよいと思う。

根拠

実名報道を認める事で家族などの人権が失われるから。

理由・小見出し　少年や家族の人権を守る

実名報道をながす事で事件をおこした犯人そして犯人の家族までもが周りの人たちから白い目でみられ毎日つらい日をすごさなきゃいけないだろう。まだ少年なのだから罪を反省してこうせいしていく事ができると思う。しかし実名報道で名前や顔を知られてしまえば、どんなに少年がこうせいして良い人間になっても周りの人間は彼をうけいれようとはしないだろう。これで本当に人権は守られるのだろうか。もし実名報道をするのならば周りの人間が犯罪をおかした少年をちゃんとうけいれると約束してからじゃなきゃ報道してはいけないだろう。

Bさんの意見文

「少年法改正」について意見を書こう

C 組 氏名 B

結論

第六十一条、実名報道を認めるべきだ。

根拠

実名をだして少年がしたことがどれだけ悪いことかわかるから。

理由・小見出し　少年も大人と同じ扱いを

自分がしたことが悪いことだとわかれば、もうこ度と同じことをしないと思えるから。実名をだして親とか親せきにいやがらせとかがあるかもしれないけど、少年が犯罪をするのは、親とかにも責任があると思う。実名をだせば、報道をとおして犯罪をすると大人になにいけないことなんだとほかの人たちもわかると思う。20才以上のんは顔写真とか名前もでる。少年がやったことでも同じぐらい悪いことだと思う。だから大人と同じあつかいをしたほうがいいと思う。

資料 3

Aさんの意見を聞いてBさんが書いた評価表

発表相互評価用紙

C 組 氏名 B

よくできていたものには「A」、ふつうだと思ったら「B」、不十分だと思ったら「C」に○を付けながら発表を聞こう。

発表者　Aさん

番号	項・目　内容	評価
①	意見を聞いて、なるほどと思ったか。	A・B・C
②	発表に自分の考えていたことは外の内容があったか。	A・B・C
③	発表を聞いたことで、自分の考えが深まったか。	A・B・C

感想

私とはまったく反対の意見だった。親とか家族の人権などのことも考えて内容がこい。

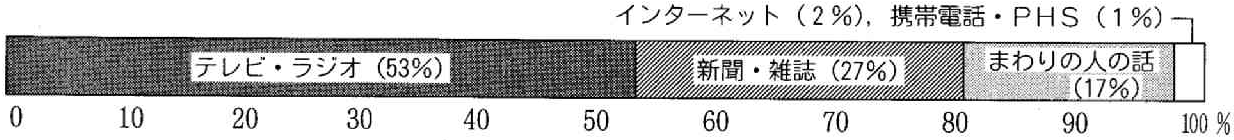
メディア・新聞についての調査結果資料

本分科会では検証授業に取り組む前に、研究員７校のそれぞれの生徒を対象に意識調査を行った。調査内容と結果は次の通りである。

①　あなたは、身の周りの事件や出来事に関する情報を主に何から得ていますか。（２つまで）

	Ａ校	Ｂ校	Ｃ校	Ｄ校	Ｅ校	Ｆ校	Ｇ校	計	%
ア　テレビやラジオから	51	155	103	157	73	87	85	711	53
イ　新聞や雑誌から	22	76	62	88	32	46	37	363	27
ウ　まわりの人の話から	21	52	27	48	23	23	34	228	17
エ　携帯電話やＰＨＳから	1	2	0	4	0	3	1	11	1
オ　インターネットから	5	8	0	5	1	5	3	27	2
カ　その他	0	0	0	0	0	2	0	2	0
（対象人数）	82	160	103	164	78	87	92	765	

（総数1342）

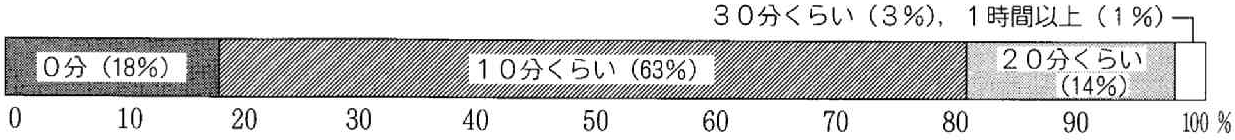


②　あなたは、新聞をどのくらい読んでいますか。

	Ａ校	Ｂ校	Ｃ校	Ｄ校	Ｅ校	Ｆ校	Ｇ校	計	%
ア　毎日読む	13	37	48	65	29	36	43	271	35
イ　たまに読む	23	68	38	61	27	28	22	267	35
ウ　ほとんど読まない	29	35	11	24	8	14	20	141	18
エ　全然読まない	16	11	6	14	6	9	7	69	9

③　あなたは、１日に新聞をどのくらいの時間読んでいますか。

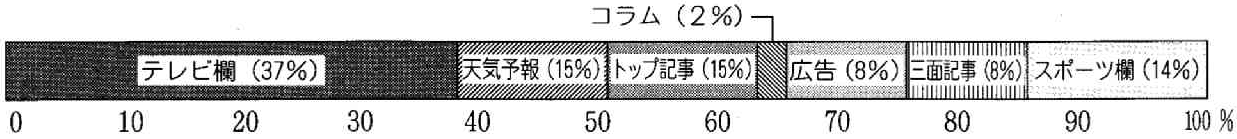
	Ａ校	Ｂ校	Ｃ校	Ｄ校	Ｅ校	Ｆ校	Ｇ校	計	%
ア　０分	19	26	13	25	13	17	21	134	18
イ　１０分くらい	41	96	78	114	47	52	57	485	63
ウ　２０分くらい	26	24	11	23	4	12	6	106	14
エ　３０分くらい	2	8	1	2	5	3	4	25	3
オ　１時間以上	0	0	0	0	0	3	0	3	1



④　あなたは、新聞の中でどの紙面の情報を主に読みますか。（複数回答可）

	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	計	%
ア　テレビ欄	45	135	99	151	64	73	52	619	37
イ　天気予報	19	40	40	62	18	36	32	247	15
ウ　一面（トップ）記事	12	69	47	65	12	40	28	273	16
エ　一面のコラム欄	2	9	9	5	1	5	8	39	2
オ　広　　告	11	32	23	33	8	17	13	137	8
カ　三面記事	13	16	28	36	5	19	15	132	8
キ　スポーツ欄	15	59	25	56	21	26	30	232	14

（1679）



⑤　あなたは、新聞の良いところは、どのような点だと思いますか。

- 情報がたくさん載っている。　46%
- テレビ欄やマンガが載っている。　17%
- 今、何が起こっているかが詳しく書いてある。　15%
- 何度でも読み返せる。　7 %
- 再利用ができる。　4 %
- 天気がわかる。　4 %
- 広告がある。　3 %
- スクラップができる。　2 %
- 毎日配達される。　1 %
- その他　1 %

⑥　あなたは、新聞の悪いところは、どのような点だと思いますか。

- 字が小さい。　36%
- 読みにくい。　22%
- 手が汚れる。　15%
- カラーが少ない。　6 %
- 読みづらい。（持ちづらい、バラける・かさばる）　5 %
- 嘘や人を傷つけることがある。　3 %
- 新聞社によって書いてあることが違う。　3 %
- 目の不自由な人には読めない。　3 %
- 漢字が難しい。　3 %
- テレビ、ラジオより情報が遅い。　2 %
- その他　2 %

これらの結果の中から、私たち2班は最近の中学生の情報源について次のような印象を受けた。

●情報源としてはやはりテレビ・ラジオが最も多いが、新聞や雑誌からの情報も2番目とかなり多く、「毎日読む、たまに読む」生徒を合わせると、7割の生徒が新聞に親しんでいる。

●そんな中で、新聞の一面の「コラム」を読んでいる生徒はわずかしかいない。

以上の調査内容により、新聞記事とコラム欄を関連づけて、教材の開発と研究に取り組む方向性について確認しあった。

(3) まとめ

本分科会では、「新聞からの情報を通して、広い視野と柔軟な発想を育てる指導法の工夫」という副主題を設定し、研究を進めた。

ここでは、数回の検証授業を行いながら改善を重ね、得られた成果についてまとめてみることとする。

① 考察と研究の成果

ア 導入教材について（「ものの見方と言葉」：教育出版　中学国語３　平成２年度版）

今回用いた教材は、物事をいろいろな角度から考え、柔軟な発想の大切さに気付かせるねらいが明確であり、導入教材として適切であった。身近な新聞記事と合わせて活用したことが、いっそう効果的であり、生徒の興味関心を促すことができた。

イ 情報について主体的に受け止め、それを活かそうとする態度を培う活動について

事前に、新聞についての意識実態アンケートを実施し、興味関心を促したり、学習者が興味、関心を持てる情報（記事、コラム）を提供した。それによって生徒が、それぞれの立場や出来事に対して主体的に授業に取り組むことができ、お互いの意見を交換することで、さらに思いや考えを深め合うことができた。

ウ 自分の考えを効果的に表現する能力の向上について

事件や事実を一つの報道だけで一面的にとらえるのではなく、そこに携わっている様々な人の立場を予想し、文章表現することによってより深い理解が生じ、効果的な表現能力の向上につなげさせることができた。

エ 他人の意見を尊重し、更に自分の考えを深める力の向上について

新聞記事やコラムを比較読みさせる活動を通して、一つの事象に広い視野と柔軟な発想を持つことの大切さを喚起させるように心がけた。今回の研究により、事実に対して、報道側（情報の発信者）の姿勢や意図により様々な見方が生じ、読者の立場としても様々な受け止め方ができることに気付かせることができた。中学生にとっても身近な「新聞」という活字を通しての情報の伝達手段に着目し、記事を精選し、研究を推し進めてきたことによって、今回のような成果をあげることができた。

② 今後の課題

ア 今回の研究では、それぞれの授業者が異なる記事を選び、検証授業に取り組んだが、今後は、それぞれの授業の成果や反省点を活かし、「記事」と「コラム」をセットにした比較読み教材を開発していくことが必要であろう。

イ 教材の新聞記事に対して、様々な立場から、生徒の感想や意見を引き出すことができたが、今後は更にその内容を深めていく授業の工夫が必要である。

ウ 教材とする新聞記事は社会、文化、生活、歴史など多岐にわたることにる。生徒の意見を膨らませていくためにも、授業者の記事内容についての深い理解がその都度必要であり、その上で道徳や社会の授業とは異なった、あくまで国語の教科性にこだわる姿勢が望まれる。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

本年度は、『情報を生かして考えや思いを深め、状況に応じて伝える力を育てる指導の工夫』を研究主題として研究を進めてきた。現代は、情報を正確に収集する能力や複数の情報を比較して自分の考えを論理的に組み立てる能力、さらに言語活動を通じてお互いの考えの交流を図っていくことの大切さが指摘されている。

本研究では、広く音声言語や文字言語による情報収集を行い、情報を比較検討していく中で考えや思いを深め、多面的で柔軟な発想のできる視点を獲得し、状況に応じて言葉の多様性を考えて、伝えていく力の育成を目指した。１班（音声言語）と２班（文字言語）にわかれて、具体的な指導法の工夫を実践的な授業を通して取り組んだ。

１班では、「言われて嬉しかった言葉」「言われて嫌だった言葉」「言ってよかった言葉」「言わなければよかった言葉」を言語体験から考察する授業を行った。同じ言葉なのになぜ、言われて嫌だったり、嬉しかったりということが起こるのか、その場の状況や年齢を違えた人たちに取材（インタビュー）をしたり、プレゼンテーション（寸劇）による情報交換を行なった。その中で、言われて嫌だった、言って失敗した場合の言葉の改善点として、言葉を加えたり、言葉をとったり、また、別の言葉に言い換えたりした。今まで気付かなかった発見や感動をしながら、言葉の持つ多様性や言葉の背景について考えを深めることができた。

２班では、「新聞」を情報源として、「凶悪化する少年犯罪の問題」「捕鯨問題」「ロシア原子力潜水艦クルスクの事故」等をテーマに、社会問題・世界情勢・事件を生徒の身近な問題として興味・関心を持たせ、一つの事件や事柄に対しても様々な意見や考えがあることに気付かせた。色々な立場から書かれた記事・コラムを比較読みするなかで、自分なりの意見を持ち、他の人たちの考えを聞くことによって、さらに考えを深めていくことができた。多面的な情報を得て、視野が広げられ、柔軟な発想が育成されたと考える。同時に言葉によって、一つの事実が固定され、歪められてしまう危険性についても気付くことができた。発信者側・受信者側の姿勢を考える一助にもなった。

今後の課題として次のようなことがあげられる。

○生徒自身が授業の中で主体的に活動し、新しい発見や感動を得るような場面を設定することが必要である。そのためには、生徒にどのような経験や活動をさせたらよいか、どのような揺さぶりをかけたらよいか、緻密な授業計画が必要であると思われる。

○国語科として「言葉」の学習という視点に立って、円滑な人間関係をつくり、コミュニケーション能力の向上を図る新しい授業の改善が求められる。

○今後は、「情報」を収集したり、選択したりする能力の育成に加えて、「情報」を人に「伝える」ことの楽しさや難しさを教える授業が必要である。